

飯田修一2011年年賀状(抜粋)

さて世界の全物理学を一新する世界一の新物理学、飯田物理学 GUPF(Grand Unifying Frame for Physics)の明確な樹立を宣言致します。すべての素粒子・原子核には、それぞれに対応する詳細で精緻な古典電磁気構造が存在し、それらの古典構造から成る古典体系に、既に良く知られている相対論的量子化の手続きを加えることにより、最先端で最高の精緻な量子物理学体系が成立することが、疑問の余地の無い形で、証明されました。この飯田物理学体系成立が、確認された以上、点電荷に伴う電磁エネルギー無限大の矛盾を内蔵する”クォーク”理論は、その存在の否定が決定的に成ります。この事は同時に、飯田物理学が一昨年度のノーベル賞の権威を否定した事を意味します。飯田物理学が解明した全素粒子、(電子、陽子、パイオン、ニュートリノ、他)の古典構造は、GUPF の英文論文、Chap. I, II, ..., XXX I, XXX II, XXX III(東京大学物理学教室図書室受付に名誉教授飯田修一寄贈文献として常備)に開示されて居り、又、日本物理学会の私の講演概要に紹介があります。なお、国際フェライト会議(ICF)の Proceedings にはその4年毎の発展の経過が報告されて居ります。人類による物理学の発展は、紆余曲折を経て居ります。その最大は天動説より地動説への、世界観の転換でしょうか。ガリレオ・ガリレイがその主役と成り、ローマ法王による投獄の脅威に曝されました。飯田物理学の建設は、それに匹敵し、世界の物理学会による公表阻止の組織運動に直面する事に成りました。併し、人類の知性は、旧学説を死守するそれらの不合理な運動に勝たねば成りません。飯田物理学の承認はそれを意味します。簡略すると、世界に存在する全素粒子・原子核には、それらに対応する古典電磁物理学構造が存在し、その古典物理学体系に、良く知られた一般量子化の手続きを加えることにより、最も進んだ物理学体系を得ることが出来るという結果で、単純明解な結論です。その結果、原子核は、陽子と中性子から構成されるのではなく、核子数、即ち、陽子プラス中性子と理解されていた数だけの陽子と、中性子と誤解した数だけの飯田パイオンとから構成され、飯田パイオン群は、スピンゼロのボゾン粒子群の本質的性格として、単一の状態に重畳・縮退して存在し、そのボゾン粒子群と陽子群がそれらを構成する超微細細線間に実在する想像を絶する超巨大な電磁力で密着相関し、その結果創られる負電荷で密着性の擬電磁ポテンシャルの中に、全核子数の正電荷の陽子群が、丁度、一個の原子の中の電子群の運動と類似した運動状態で存在します。此の場合、次元解析で明示出来るように、原子の電子構造のボーア半径に対応して原子核の陽子構造のイイダ半径が現れ、その大きさはボーア半径の1836分の1で在り、それが原子核の大きさの単位に成ります。原子核が陽子と中性子から成るとした現状教科書の記述は改正され、陽子と飯田パイオンより成ると表示されます。